

トマス・ハーディのアンチ・スーパーナチュラリズム

——回心をてがかりに——

“I don't believe in anything supernatural.” (*Tess* 311)

栗野修司

Demythologizing Conversion: Thomas Hardy's Critique of Supernaturalism in *Tess*

[Abstract]

Thomas Hardy's *Tess of the d'Urbervilles* (1891) offers a trenchant critique of the supernatural in general and conversion in particular. Hardy's text is ambivalent in the sense that ballads, omens, and fantastic and eerie gothic motifs permeate it whilst readers won't miss references to the biological and geological sciences. Since the text is thus put in a twilight zone, it is crucial to investigate how the heroine Tess practices and experiences the borders between the supernatural and the scientific: She is often beleaguered by omens and superstitions, but confesses that she does not believe in the supernatural. A “sinned” Tess wishes to gain a new life like many religious converts while a scientific Tess rejects supernatural beliefs. The binary opposition between the supernatural and the scientific haunts the text as does the guilt-ridden heroine who just wants to escape the past, and it culminates in Alec's conversion and backsliding to his original state. How, readers may ask, can the efficacy or mode of conversion be justified? This is the moment when they find that Hardy's criticism of the supernatural is directed—covertly but strategically—to St. Paul who was famously converted on the road to Damascus (Acts 9).

Hardy's sardonic employment of conversion in *Tess* leads us to think that, despite his fascination with the supernatural, he distances himself from miracles in the Bible generally and from conversion specifically. We are reminded that he was a man of “scientific humanism” and in the “main line of Victorian rationalism.” With his discrediting of “the doctrines of the supernatural” in Christianity, he is resolutely opposed to conversion. This reading of Hardy contextualizes the supernatural in *Tess* to reveal the surprising “politics” embedded in his religious discourses.

Keywords: Thomas Hardy; *Tess of the d'Urbervilles*; conversion; the Bible; supernaturalism

トマス・ハーディが20世紀に入って、「自分は幽霊をこの目で見られるなら、寿命を縮めてもよい」(F.E. Hardy 358) と言っているのは注目に値する。この言葉は彼が幽霊の存在に懐疑的であるという証拠であろう。千里眼、テーブルたたき、霊言などの心靈現象に国民こぞって関心を抱き、降霊術 (séance) に参加する貴顕名士も少なくなく、妖精写真にまんまとだまされる作家まで出現した (See Conan Doyle, “The Coming of the Fairies” [1922]) ヴィクトリア朝に生きた人物の中では、彼の^{スーパーナチュラル}超自然的な現象に対しての考え方は例外的だと思われるからである⁽¹⁾。幽霊が彼の作品に登場しないわけではない。むしろ読者は彼の作品で多くの幽霊と遭遇するが、ほとんどの幽霊は視点として使われていたり、現在の中に介在する過去 (記憶、罪悪感、ノスタルジア) の表象であったり、カリカチュアであったりするにすぎない。これらの事実を考慮すれば、幽霊を含む超自然的な事柄に強い関心を持ちながらも⁽²⁾、それを実際に目撃するまでは存在を信じないという、実証的で科学的な姿勢を彼が持っていたことは明かであろう。

ことは幽霊で終わらない。彼のキリスト教批判も幽霊を含む超自然現象についての彼の疑念から生まれたと考えられるからだ。聖書は多くの奇跡譚に満ちている。聖書の多くの超自然現象の記述の中で、ハーディのキリスト教批判はもっぱら回心に集中している。彼の後期小説、特に *Tess of the d’Urbervilles* (1891) にはキリスト教についての言説がちりばめられていて、一種の「宗教小説」の色合いを帯びているが、では、どのような色を持っているのだろうか。これまでほとんど考慮の対象になってこなかった回心を手がかりに、この宗教小説の隠されたメッセージをテキストから浮かび上がらせてみたい。

I

英語の conversion に相当する日本語は「改宗」と「回心」である。「改宗」は「今まで信奉していた宗教 (宗派) を別のものに変えること」(『新明解国語辞典』第六版) で、日本人はこちらの意味しか知らない場合が多い (『新明解』もこの定義しか載せていない) が、ここで論じるのは「回心」である。SOD の定義を借りれば、「罪深い生活から宗教的な生活への精神的な変化」ということになる。しかし、この意味は中世から存在したが、イギリスでは18世紀になって「急増」した。その遠因はカルヴィニズムであった。イギリスのプロテスタンティズムはカルヴィニズムに発していて、その特徴は「予定 (predestination)」、つまり、人が救済されるかどうか、死んでから天国へ召されるかどうかは、生まれつき決まっていて、生きている間に善行を積むかどうかとは無関係であるという考えであった。カルヴィニズムにいくらかは批判的であつたらしい Charlotte Brontë は、セント・ジョン・リヴァースという「汚れのない生活をし、良心的で、宗教的熱意に溢れた」(*Jane Eyre* 371) 人物をカルビン主義者として描いている。謹厳実直にして思いやりもあり、誠実でもありながら、人間的な魅力に欠けると

描写されるこの若者には「奇妙な厳しさがあった [が] 人に慰めを与えるような優しきは欠けていた」とブロンテは書いている。「カルヴィニズムの教義—神による選び、予定、定額 (election, predestination, reprobation) —を断固とした態度で口にする」(*Jane Eyre* 371) セント・ジョンはカルヴィニズムがなぜ多くの人を引きつける魅力を欠いていたかという理由と、なぜその教義は見直され、新しい宗派が出現しなければならなかったかを雄弁に語っているようだ。カルヴィニズムの予定説は、社会階層が比較的安定していた時代には、階級制度の正当化のために意味を持っていたが、社会階層の流動性が大きくなると不都合を生じた。選民 (the elect) のみが救済されるというのでは一般庶民は浮かばれないからである⁽³⁾。やがてカルヴィニズムの修正版とも言うべきアルミニウム説 (Arminianism) が現れた。これはカルヴィニズムの予定説を否定して、自由意志を強調し、神の救いは全人類に及ぶとした (Jay 21)。それを真っ先に採用して、教義の中心に据えたのが Evangelicalism (福音主義) であった。

エヴァンジェリカリズムは神と人 (自分) とが一对一で向き合うこと、靈的経験を重視することを重視したが、もう一つ尊重されたのが回心である。エヴァンジェリカリズムは洗礼や堅信礼 (confirmation) を受けても、一度は回心しなければならないと教えている。つまり回心によって「一度生まれ変わる」というのがエヴァンジェリカリズムの思想である。回心は過去の (罪の多い) 自分を現在から切り離すと言い換えることができる。また、祭祀を執り行う者の介在なく神と一对一で向き合うことも重視した。教会での儀式よりも聖書を読むことを重視したのである。罪深い自分というアイデンティティと向き合っ、神との個人的な関係を確立した。そのため教会という集団的な権威を必要としなかった。

さてその回心をシャーロット・ブロンテの父親が分かりやすく説明しているので、彼の説教を引用する—

「私たちが回心すると、キリストのもとで新しい人間に生まれ変わります。古いものを捨て去るので—世俗的な欲求、好ましくない性癖や欲望、宗教についての誤った考え、靈的なものへの無関心、さらには信仰を敵視することなどがなくなります。そうして、あらゆる感情や性向が純化されて、心が啓発を受けます。私たちの心は信仰心と神への愛で満たされるのです。」 (“Sermon on Matthew 3 : 11” qtd. in Baker 43)

ブロンテの父親のパトリックはエヴァンジェリカリズムではなく、アルミニウム説に傾いていたと言われている。この修正されたカルヴィニズムの、アダムの子孫として生まれた我々はすべて墮ちた存在として生まれつくので、人生のある時期に新しく生まれ変わる必要がある、という点に魅力と説得力を感じたためであった。このような考えはカルヴィニズムの選民思想から一般の人たちを解放すると同時に、誰であっても回心体験が義務づけられたことを意味する。

しかし、善男善女であれば誰でも回心を体験できるかというと当然疑問符が付く。回心のよ
うな奇跡体験を誰もが経験できるとは限らないし、何よりも回心であったかどうかという証明
も検証も不可能である。単に夢を見ただけかもしれない、感激のあまりの精神的な高揚にすぎな
かったかもしれないのに、本人がそれを回心だと思い込むことは十分あったろう。多くの回心
体験がメソヂスト派の出版した雑誌に掲載された。その中から一例を引こう――

「私は跪き、立ち上がるまいと心に決めて、大声で神の名を呼び続けながら、私と格闘し
た神を見失わないようにした。とうとう神は私に慈悲を与えたもうた。どのくらいその苦
しみが続いたかは分からないが、空を仰ぐと雲の間に非常に明るいものが広がったのが見
えた。そこに私はキリストが十字架に架けられているのを見た。と同時に次のような言葉
が私の心に浮かんできたのだった。『汝の罪は許されり。』私は縛めを解かれて、心は自由
で満たされた。」(qtd. in Kent 96-7)

これは、メソヂスト派の説教師の体験談を集めた書物からの引用である (T. Jackson, *The Lives of Early Methodist Preachers* [1846])。メソヂスト派の説教師には特別な資格が要
求されなかったので、回心体験があればなることができた。この体験談の作者のサムソン・ス
タニフォースは軍務に服していた1744年のある日の真夜中に警邏中、回心を体験した。その体
験談である。この体験談は、しかし、彼のオリジナルではなさそうだ。というのは、神と格闘
したというヤコブの逸話(「創世記」32:25)やクレネ人やアレクサンドリア人などトリベル
テン会堂で討論したステファノの「天が開いて、人の子が神の右に立っておられるのが見え
る」という言葉(「言行録」7:56)を踏まえているからである。これらの逸話は聖書に親しん
でいる人なら誰でも知っている有名な箇所、スタニフォースはヤコブ(この神との格闘の後で
神にイスラエルと名乗ること、彼の子孫がイスラエルを建国することなどを告げられる)とス
テファノの神との出会いを追体験しているのである。我々が自分で読んだ本の内容を夢に見る
ように、スタニフォースも聖書を読んで(メソヂストであったら、聖書を毎日読んでいたで
あろうし、聖書しか読まなかった人も少なくなかった)、その中の逸話を夢に見たという可能
性は十分ある。

回心体験を信仰の中心に位置づけるメソヂスト派やそれと同じくエヴァンジェリカルイズム
から派生した宗派は、それぞれ独自に回心体験を集めた雑誌を出版していた(これが回心体験
を重視する宗派の特徴でもあった)が、それらを調査して、「回心体験はいやましにステレオ
タイプ化していく傾向があった」という指摘がある (Watts 51)。雑誌で読んだ回心体験を自
分のものとして、今度は自分が雑誌に投稿するということがあったであろうことを、この「ス
テレオタイプ化」は示唆している。また、メソヂストは悪魔が人間の姿をして現れるという
言い方で、子供時代から原罪意識を植え付けられていたそうだから (Mack 65)、この共通体

験が回心の枠組みに組み込まれて (心に植え付けられて)、同じような回心経験につながったのだと考えるのはあながち間違いとも言えない。別の研究者によれば、回心体験の持ち主には一定の共通項を見いだせるそうである。そのひとつとして回心は十代で起きることが多い (Hempton 63) というのは、精神的に不安定な時期であることと無関係でないだろう。深い孤独感も若い世代の回心体験の多くに共通しているという研究もある (Mack 75)。メソヂスト派の特徴である野外集会や伝道集会で連鎖的に起きることがあったというから、回心がマスヒステリアであったと考えても的外れではあるまい。回心の「感染力」はとても強かったのである。

実際、メソヂスト派のチャペルや野外集会では、「予言や夢やトランス状態や幻覚が頻繁に起こった」(Griesinger 83) そうだ。グリーシンガーによれば、メソヂスト派の創始者のウェズレーも超自然的な現象をしばしば経験したそうで、教会制度の革新も彼が霊的経験をしたことが直接の原因となっているという。シャーロット・ブロンテの叔母のマリア・ブランウェルは1804年から1821年まで刊行された『メソヂスト・マガジン (*The Methodist Magazine*)』を講読していたが、その経験を基にしたらしい記述が『シャーリー (Shirley)』(1849)に見られる。その記述もメソヂスト派の特徴的な性格をよく示している—「きちがいじみた『メソヂスト・マガジン』には奇跡や幽霊が盛りだくさん、超自然的な予兆だとか、不吉な夢だとか、狂信的な話もいっぱい」(389)。このようにして回心は一般化し、多くの人が精神的覚醒をしまっとうな人間になった (と思い込んだ)。エヴァンジェリカリズムやメソヂイズムの、こういう非科学性が多く信徒を集める結果につながったと同時に、その成長の限界にもなった。こういう宗派の信徒は中産下層階級でほとんど占められ (Melnyk 36)、未だ迷信と科学との境界線あたりに住んでいたが、19世紀も半ばになると教育の普及によって、エヴァンジェリカリズムやメソヂイズムから離れる人が増えてきたからである。

George Eliot も (1819年生まれ) エヴァンジェリカルの中で育ち、その影響を受け、しかし、やがてエヴァンジェリカリズムから離れた一人である。エリオットは寄宿学校在学中にエヴァンジェリカルの教師の影響を受けて、エヴァンジェリカルとして少女時代を過ごす、やがて Unitarianism に近づく。ユニタリアンは合理性を旨とする先進的な宗派で、彼 (女) らは「キリストは偉大な教師であり哲学者でもあるが、神の息子ではない」と考えて、「どのような情報であれ新しい情報には疑問を持って接するのが個人の義務」だという科学的な態度を持っていた。これにエリオットは大きな影響を受ける⁽⁴⁾。この頃彼女が読んだ本の一冊に、ヘンネル (Charles Hennell) の『キリスト教の起源探求 (*An Inquiry Concerning the Origin of Christianity*)』(1838)がある。ヘンネルは、キリストにまつわる歴史的事実を神話や空想から切り離し、「彼に起きたことはすべて『自然の法則』の範囲内で説明可能」という主張を展開している。エヴァンジェリカリズムの最盛期にキリスト教を科学的に分析しようという考えが表明されたわけだが、ヘンネルはキリスト教を否定したわけではない。そうい

う点では、キリストを救済への道筋としてではなく、人々の目指すべき人、倫理の教師と考えたエヴァンジェリカル (Helmstadter 85) とそれほど距離が遠くない。両者ともにキリスト教を現実的にとらえようという意識が見られるからである。しかし、エリオットはドイツの高等批評に接して、キリスト教の枠内に留まらなかった (1842年)。この点がハーディと異なっている。

それでも、エリオットは、エヴァンジェリカルイズムやメソディズムが人々を引きつけていた時代を懐かしんでいた。想像の世界と現実とが渾然一体であった時代、人の一生に例えれば幼年時代、一日に例えるならば、暁の光が差し始めて、夢の世界が現実に移り変わらんとする頃を懐かしんでいた。そのような心地よいノスタルジアに浸ることのできる作品が『アダム・ビード (Adam Bede)』 (1859) である。「科学の世紀」である19世紀を迎える直前 (1799年6月18日から始まっている) を時代背景に、登場人物は超自然現象 (回心もそこに含まれる) とともに生きていた。アダムの父親が川でおぼれて死ぬとき、彼の家族の経験したその予兆ともいえるべき不思議な出来事を描いている。しかし、超自然的な現象から距離を置くエリオットは自分の立場を明確にするために、自分の語っている物語は、アダムからの又聞きであることをわざわざ断っている (「アダムが年を取ってから、これらの事柄について [私＝語り手] 彼と話しました」 [225])。過去と現在の決して埋められることのない断絶を認識しながらも、それゆえ過去の強い引力に抵抗できないエリオットをここに見ることができる。ハーディの作品にはノスタルジアは見られても対象と距離を置くという姿勢は見られない。彼の作品は背景を過去に置いていても、問題意識は現在のものであるからだ。それをはっきり示しているのが『テス』である。

II

メソディストの回心体験に共通するのは彼らの罪の意識の大きなことである。このことは彼らが自分たちの罪深さを生来のものと考えていた (Mack 67) から当たり前のことだが、それを認識することが神のもとでの再生につながるというのがウェズレーの強調したことだった (Mack 71)。回心によって人は生まれ変わることができるというわけだが、奇跡としての回心に対する疑問が『テス』の底流にあり、それが登場人物の言葉や性格や行動として表面に表れる。その一例を引こう。改心して回心したアレックにテスは言う―「あなたが回心を遂げて、新しい精神に生まれ変わったなんて、私は信じないわ。あなたが感じている良心の輝きは、長く続かないと思うわ」 (301)。回心による生まれ変わりを疑いながら、実は、テスはそれを願ってもいるという点、つまり、テスの回心や罪人^{つみびと}の生まれ変わりについてのアンビバレンスも回心の文脈に置いて考えるとき、初めてその意味が明らかになる。

回心の文脈に置くと、意味が明瞭になるもう一つのテーマが連続、不連続という問題である。

回心は過去の自分と現在との間に不連続線を引くという宗教的行為で、それゆえに、回心は時間の不/連続というテーマと関わってくる。テスが、自分と同族、実際には偽物のダーバヴィル家へ親戚名乗りに出かける。ダーベイフィールド家は中世の騎士の末裔、アレックのダーバヴィル家は金貸しで成り上がって、断絶して久しいと考えられていたダーバヴィル家を勝手に名乗った偽物である。(ここで、家系の連続、不連続が描かれる。家系という連続を意味する話でこの小説は始まる。) テスはダーバヴィルの「御曹司」に誘惑されて、その子供を生むが、赤ん坊は生まれてすぐ死んでしまう。こうして、彼女はヴィクトリア朝で使われた表現を借りると「墮ちた女 (fallen woman)」になるわけで、彼女の人生は18歳で分断されて、墮ちる前と墮ちた後に分けられる。(エヴァンジェリカルなどが回心を重視するのは、すべての人間は墮ちたアダムとイブの子孫だから、その前の状態に戻るために回心する必要があると考えるからである。テスも従って墮ちる前の状態に戻るためには回心する必要がある。) これも連続、不連続の問題と関わる。エヴァンジェリカルの牧師の息子エンジェル・クレアと知り合って愛し始めるが、過去は彼女に重くのしかかる。「なぜあなたは私が16歳の時に(初めてであったとき)私の元を去らないで愛して下さらなかったの」(Tess 196-7)というテスの言葉はそのことをよく示している。

これは彼女の時間の不連続を願う言葉、あるいは墮ちる前の状態へ戻りたいという希望の表明だが、一方で、彼女は時間の連続を恐れている。例えば、テスがエンジェルを知って間もない頃、「なぜ歴史を学ばないのか」と問われて彼女はこう答える—

「自分が長い列に並んでいる人たちのうちの一人に過ぎないと知ったからといって何になるでしょう。何か古い本の中に自分とよく似た誰かについて書かれていると分かって、自分がその人の役割を演じることになると知ったら悲しくなります。」(Tess 130)

テスの運命観に仮託して、ここで繰り返しの連続性を暗示する意見が述べられている。テスは彼女以前に同じような人生を繰り返した何千という人の人生を繰り返すと言っているが、これを補強するかのように、テキストのあちこちで彼女は、同じ名前を持つセント・テレサや同じように陵辱されたルクレチア (Tess 357) や創世記のイヴなどにたとえられる。これは時間の連続性の問題であると同時に、テスのアイデンティティの問題であるわけだが、自分は、エンジェル・クレア夫人ではなく、実際にはアレック・ダーバヴィル夫人ではないかという、新たに生じた疑問も、時間とアイデンティティの両方に関わってくる—「彼女はエンジェル・クレア夫人であることに間違いはない。しかし、その名に値する道徳的な権利があるだろうか。単に名前だけのクレア夫人ではないか、本当はアレクサンダー・ダーバヴィル夫人ではないのか」(Tess 212)。この小説が、テスのアイデンティティを問題にしているということは、既にこの小説の副題、「清純な女 (A Pure Woman)」から明らかだが、アイデンティティの問題

は、時間の連続、不連続の問題と不可分である。

テスにとって、時間は連続しているようであるが、エンジェルとアレックにとってはそうでもなさそうだ。テスは過去を告白しないまま結婚して、初夜にそれを告白するが、その内容にショックを受けたエンジェルは「私の愛していた女は君ではない」(Tess 226)とか、「今の君は昔の君とは別人」(Tess 247)などと批判するからである。ここではエンジェルが、テスの人生は不連続=分断されていると見なしている。自分と家族のために必死で働いているテスは、エンジェルの父クレア牧師によって回心させられてメソディスト派の巡回説教師となったアレックと偶然出会う。彼は「覚醒の日がやってきたんだ」(Tess 293)とテスに自分の回心を告げる。彼は自分の罪深い過去を断ち切って生まれ変わったと考えているのである。エヴァンジェリカリズムの回心というのはまさに罪深い過去の自分との縁切りということで、アレックは conversionist (160) と呼ばれたクレア師の影響を受けて、過去の放蕩、墮落の生活から足を洗ったのである。エヴァンジェリカルやメソディストならば彼が罪人から救済への道をたどり始めたと考えられるであろう。こうして、連続/不連続の問題は回心のテーマと絡み合いながら、プロットを織り上げる。

しかし、テスと再会して、彼の言葉に拠れば「テスに誘惑されて」(「宗教の回路はたちまち干上がってしまったよ、その原因になったのは君だけだね」[Tess 318])、この後すぐにアレックはもとの放埒なアレックに逆戻りしてしまう。これは宗教的な回心に疑問を投げかけると同時に、回心で象徴される時間の不連続性にも疑義を呈するエピソードになっている。事実、アレックの回心がかりそめのものでしかなかったことを発見したテスは、「自分を取り巻いている執念深い過去」を感じ始める (Tess 298)。もとに戻ったアレックは、テスを追いかけて回す。そんなアレックにテスは思わず平手打ちを食わせるが、自分の行為に驚いて、「一度犠牲になったら、いつも犠牲になってしまう、それが定め」(Tess 321)と口走る。ここにも連続性を示唆する言葉がある。回心はそのような連続した時間にくさびを打ち込む。過去と現在に断裂をもたらすわけで、そういう奇跡が実際に起こるならば、テスにとっては「福音」だろう。しかし、アレックの回心が回心と見えて、実は回心ではなかったことは、不連続であるように思われても、実際には過去と現在は連続しているのではないか、という彼女の疑念を補強する。「以前の存在と現在の存在との連続性の断絶は彼女がずっと願っていたものだったが、結局起こらなかったのだ」(Tess 298-9)という表現は、彼女の願望(時間の不連続)と彼女の恐れ(時間の連続)の両方をよく表している。

このように、人は変わることができるのかというアイデンティティの問題も時間の連続、不連続の問題も回心の文脈に置いたとき明確な形をとる。しかし、それを確認するためには、ハーディの回心批判がテキスト内に限定されるのではない、ということを知る必要があるだろう。

III

ハーディのキリスト敎批判はスーパーナチュラリズム批判であった。ハーディの手紙はそのことをはっきり示している。まず、1885年と1902年に書かれた手紙—

宗教界には、超自然的神学を信じることを止めた思慮深い人たちが欠けているということを新聞雑誌はなぜ無視するのだろうか。(Selected Letters 40; 1885年)

英国国教会が、超自然の教義を明日静かに捨て去って、「倫理的な理想を尊重し愛すること」だけを残したとしても、1万人のうちのひとりさえもその再建に反対しないだろう。(Selected Letters 145; 1902年)

二通の手紙の間には20年近い隔りがあるが、同じようにハーディはキリスト敎(英国国教会)のスーパーナチュラリズムを批判している。この事実からも、彼の迷信批判が執拗であったことがよく理解できる。ここでもキリスト敎義全体を批判しているのではないということに注意すべきである。そのような認識を前提にして初めて、この記事の中身を詩の形式によって、直裁に表現した次の詩は正しく理解できる。

例えば、聖母マリアの処女懐胎はその非科学性ゆえに彼の批判を免れなかった。だから、次の詩をキリスト敎批判と拡大解釈することも、聖母マリア崇拝批判と矮小化することも当を得ているとは思われない。さてその詩、「ガリラヤのとある夕べに (An Evening in Galilee)」は、「私の息子は気が狂ったのかしら」という疑問を抱く女の独白の形を借りている。その第二連では、彼女は息子に愚痴をこぼしている、と言うのは、彼があれやこれやの教義を説くから—

「まるで年寄りみたいに、それも五十過ぎの。

神殿では肝を冷やしたわ、偉い坊さんに言葉を返すのなもの。

なぜ母親の私に向かって言うの、『あなたと私にどんな関係があるのか』と。

自分が腹を痛めた息子にそんなことを言われるなんて、のどを切られるようにつらいこと。

『私の母は誰ですか』とも言ったわ。ちゃんと知っているくせに。

『父は誰ですか』と聞いたとしたら、ちょっと答えに困ったでしょうね。

その答えは、ジョーゼフと一他にもう一人だけしか知らないわ。二人以外の他の誰も知ることはないだろうけれど。

もう一人の人は二度と会うことはないわ。本当に魔が差したのね—ジョーゼフを裏切るつもりは毛頭なかったのに。」(7-14)

福音書の記事に対応するような愚痴をこぼす女（「あなたと私にどんな関係があるのか」は、*“Jesus saith unto her, Woman, what have I to do with thee? Mine hours is yet to come.”* [John 2 : 4] に対応している。）は、名を明かされていないがマリアで、息子を追いかけ回す品のない女（こちらもマリアだが、マグダラのマリア）のことで気をもんだり、やがて息子が逮捕されて死刑になるのではないかと心配したりする（この不安が後に現実のものとなることはキリスト教徒なら誰でも知っている）。聡明で、演説がうまくて早熟の息子を持った、少し身持ちは悪いが、イノセント（無知で無邪気）な女の独白の形を借りて、ハーディは処女懐胎という奇跡譚を皮肉っている。奇跡譚を皮肉に描きながら、しかし、ハーディはキリスト教そのものを批判しているのではない⁽⁵⁾。自分がやがて崇拜の対象に祭り上げられるとはつゆ知らぬ女の愚痴のおかしさによって、刺すような皮肉が和らげられていると考えるかどうかは読者の判断だが、「事実」と聖書の描く奇跡の数々との乖離を暴き立てることが、この詩の狙いである。読む人が微苦笑を禁じ得ないような愚痴をこぼす女と聖母を隔てる裂け目を埋めるのは、数々の奇跡譚である。自叙伝に「福音書の物語がどんな事柄でも真実だという証拠はかけられない」（F.E. Hardy 445）と書いたハーディの一貫した姿勢をここに見ることができる。

聖書の奇跡譚と「事実」の間にあるのと同じくらい深い裂け目が、「罪人中の罪人」サウロと義人セント・ポールの間に横たわっていて、それを埋めるのが回心である。『テス』でハーディが展開する聖書に描かれた奇跡批判はまずエンジェル・クレアによって、英国国教会の39箇条中の（キリストの復活について述べた）第4箇条を「文字どおりに、文法的な意味として受け取る」（*Tess* 120）こと拒否するという形で表れる。これははっきりした形を取る批判だが、アレックの回心を迷信と結びつける批判は、テキストに埋め込まれて、意識しないと具体的な像を結ばない。

アレックの回心が形だけのものであったことは、エヴァンジェリカリズムの基本理念そのものにも疑義を抱かせることになるが、これはハーディが生涯関心を持っていた宗教的なテーマの一環となる戦略である。Chadwickによれば、ウェズレーの始めた回心の有効性（効き目）や方法や性質については、彼が生きている時代に既に論争的になっており、死後もずっと疑われていたそうである（I, 5）。それは同時にセント・ポール（のキリスト教）に対する批判にもつながっている。アレックの回心の欺瞞を描くことはセント・ポールの、あの有名なダマスカス街道での回心の欺瞞と通底するのである。それを踏まえて、改めてテキストを読むと、回心してメソディスト派の説教師となったアレック⁽⁶⁾が頻繁にセント・ポールを引用することの意味が理解できる。『テス』ではアレックの背後にセント・ポールが透けて見えるからである。

語り手は用意周到で、回心してメソディスト派の巡回宣教師にして「すばらしい、火のように激越なキリスト教徒」となったアレックを描写して、彼の説教は「予想されたとおり、極端な無律法主義（antinomian）であって、セント・ポールの神学で詳しく説明されているとお

りの、信仰による正当化であった」(Tess 292)と書く。語り手は皮肉にアレックを眺め、彼と同じレベルでセント・ポールをも眺めているようだ。アンティノミニアンイズムは無律法主義とか道徳律不要論という日本語訳から分かるように、キリスト教を信じる者は福音に示されている神の恵みの救済を受けるから道徳律から解放されると主張する信仰至上主義である。放蕩に耽り、親不孝をし、クレア牧師を侮辱しと、悪行の限りを尽したアレックにとっては都合のよい教義である。「予想されたとおり」とわざわざコメントを付けて、語り手はアレックのご都合主義を皮肉っている。セント・ポールのご都合主義もここで暗示されている。

回心したアレックについて語り手は容赦がない。回心した彼を見て、テスは「その対比の皮肉でたちまち気分が悪くなった」と語り手は書く—「それは改心 (reform) というよりは変身 (transfiguration) であった。[...] 獣欲は狂信となり、異教信仰はパウロ主義となったのだ」(Tess 298)。回心の文脈では、アレックはセント・ポールと同列に扱われる。そして、アレックを皮肉と批判の俎上に乗せながら、同時にセント・ポールにも皮肉と批判を投げかけている。改心と変身、獣欲と狂信を「対比の皮肉」と決めつけるだけでなく、異教信仰とパウロ主義の対比も皮肉だと言っているのである。異教信仰がパウロ主義に「変身」したという含意は重要である。というのは、異教とパウロ主義の共通点であるスーパーナチュラルイズムを指していることが、ハーディのセント・ポール批判の文脈からは明らかであるから。

アレックとセント・ポールが近縁であることは、アレックが説教にしばしばセント・ポールの言葉を引用することで暗示され (Tess 298, 300, 308, 319)、やがてそれははっきりと述べられる—

ダーバヴィルは生きている間に自分の魂を救済しようと、自分の邪悪な行為から足を洗った最初の悪人ではなかった。だから、彼の場合にそれが不自然だとなぜ見なさなければならぬのだろうか。今、福音が昔のよこしまな声で語られるのを聞いてそれまでずっと彼女が耳障りに思っていたのは、いつもの考え方をしていたからに過ぎなかった。罪深い人間であればあるほど、偉大な聖人になることができる。そのことを発見しようと思えば、キリスト教の歴史をそれほど昔まで遡る必要はなかった。(Tess 298)

ここにはセント・ポールについての直接の言及はない。しかし、アレックとポールの近似性が既に明らかなので、セント・ポールを念頭に置いて読むべきパセッジであることは明白である。彼が神の名を呼んで、自分の罪を洗い流したという「言行録」9. 1-9; 22. 16などに描かれる彼の回心を当てこすっている。セント・ポールの人柄に疑問を呈しながら、回心についても疑義を呈しているのである。回心の文脈で『テス』を読む人には、ここがクライマックスである。そしてそれは皮肉なクライマックスでもある。エンジェルは信仰39箇条を批判したが、アレックはセント・ポールのキリスト教とキリスト教の超自然主義に読者の目を向けさせる。テスを

巡っては恋敵、性格も対照的に描かれる二人であるが、このように回心の文脈で二人のアイデンティティは（皮肉なことだが）重なり合う。キリスト教のスーパーナチュラリズム批判では、ふたりは見事に「共謀」しているのである。

セント・ポールのキリスト教を批判するのはハーディが最初ではない。ハーディ自身が1906年に『タイムズ』紙に宛てた手紙の中で、「前世紀のもっとも深い思想家の一人」(F. E. Hardy 330)と賞賛している John Stuart Mill も同じ批判をしている。彼の死後に出版された「宗教三論 (Three Essays on Religion)」で、ミルは聖書に描かれた奇跡を自然現象のレベルに引き下ろして、科学によって検証すべきだと主張している。すなわち、「宗教の主題は、厳密な科学的問題として折に触れて検討されるべきだし、その証拠も自然科学によって導き出された思弁的な結論のどのようなものとも同様の科学的な方法により、また同様の原理に基づいて検証されるべきである」(430)と述べている。ミルは宗教を他の自然現象と同じ地平に置いていて、科学の検証を超越した特別の存在とは見ていない。このようなやり方で、彼はキリスト教の神格化や権威づけの根拠になっている奇跡をも徹底的に論破しているのである。聖書に通じている人は誰でも、セント・ポールがキリスト教信徒の容赦のない迫害者であったこと、それなのに彼がイエスの啓示によって回心を遂げたこと、その後使徒となって遍く福音を告げ知らせたことをよく知っている。そして、彼はエルサレムで捕らわれて千人隊長の前で (22. 30-)、カイサリアではやはり捕らわれてアグリッパ王の前で (26. 1-)、自分の経験した奇跡を語っている。サウロ時代はキリスト教の迫害者であったと自分の履歴を語るセント・ポールは、宣教者としては他の誰よりも優れて雄弁であったと言わざるを得ない。サウロとしてのポールが極悪非道であればあるほど、彼の回心は奇跡として大きな意味を持つからである。つまり、現在の義人ポールと回心前の迫害者サウロとの落差の大きさは神の慈悲の深さを証明するものであるし、それによって、イエスの神格化とポール自身、神の信託を受けたものとしての権威づけが一層確実になるわけである。その意味で、ミルの「宗教三論」でのキリスト教批判が、イエスの神格化とポールの権威づけの根拠となっているダマスカス街道での回心に向けられたのは当然と言えよう。

ミルはその結論で、「奇跡はそれが歴史的な事実であるというどのような特徴をも持っていないし、どのような啓示の証拠としても無効である」と断言している (481)。また、セント・ポールの回心 (9. 22-, 22. 6-) については、「新約聖書に描かれた全ての奇跡の中で、自然の原因によって最も簡単に説明できるもののひとつ」(480n) とみなして、奇跡であることをはっきりと否定している。そうであれば、ポールが自らの権威と正統性の拠り所として挙げるキリストの言葉—「私があなたに現れたのは、これまであなたが目撃してきたことと、これから私があなたに示そうとすることについて、あなたを奉仕者かつ証人にするためである」(「言行録」26. 16)—は彼の妄想にすぎず、自分はキリストによって特別に選ばれた使徒であるという彼の主張の根拠は失われてしまうことになる。

ミルを生涯の友としたハーディのキリスト敎批判も、彼と同じ軌跡を示す。後年、聖書に含まれる奇跡に対する批判として明瞭な形をとり始めるのである。ハーディは1907年に、かなりまとまった分量のキリスト敎批判を『ハーディ伝』に残しているが、その中でキリスト敎会が敎理に含めている迷信を批判している—

日曜日ごとに敎会の礼拝式で、敎理となっている迷信の数々を我々は読んでいるが、それは我々の祖先が信じていた古い信仰箇条を記念して朗読しているにすぎないということは、それほど問題ではないのかもしれない、皆がこれをよく承知している限りは。(F. E. Hardy 333)

信仰を善の実現のための生活と行動の指針として、人々が高貴で純粋な感情を持ちえた時代ならばいざしらず、科学が人々の心の中に入り込み始めた時代には、人々は敎理も迷信にすぎなくなっているということを知りながら、「記念」として朗読している、そして、敎会が敎理としてあがめている奇跡が今や無意味な迷信でしかない、とキリスト敎(厳密には英国国敎会)を批判しているのである。同じ年に、宗教は典礼や儀式の同義語であってはいけないとも言っている(332)。キリスト敎批判に関しては、ミルが辿った道をハーディも歩んで、敎会の迷信崇拜批判に至るのである。

19世紀半ばの聖書の高等批評、進化論、地質学的発見によって聖書に含まれているスーパーナチュラリズムは足下を崩された感があったが、それでも頑固に生き残って、ヴィクトリア朝の中期や後期にも知識人を悩ませた。リットンのジレンマ(Noakes 23)、キリスト敎に含まれる奇跡と科学の妥協点を模索したマシュー・アーノルドがたどりついた広敎会的処理方法など、キリスト敎とスーパーナチュラリズムを関連させて批判したのはハーディが最初ではない⁽⁷⁾。例えば、アーノルドは英国国敎会と非国敎会各派はキリスト敎敎義をゆがめたり誇張したりして、その結果迷信に墮したと批判している、ただし、アーノルドは迷信を英語ではなく *Aberglaube* とドイツ語を使って批判の度合いを薄めているが(Harris 27)。それに比べれば、ハーディの批判は具体的であるだけでなく、スーパーナチュラリズム批判に限って言えば、執拗で容赦がない。彼を「ヴィクトリア朝期の合理主義の正統派(the main line of Victorian rationalism)」(Hynes 40)に位置づけたり、「科学的人文主義者(the man of scientific humanism)」(Davie 5)と呼んでヴィクトリア朝の他のキリスト敎の批判者と区別したのは、そういう意味でおそらく正解であろう。

IV

ハーディの死後、ウェストミンスター・アビーに遺体の一部が葬られたが、そこに至るまで

にハーディが善きキリスト教徒であるという証明をするよう要求されたという。時の首相のポールドウィンや『タイムズ』紙の編集長のドーソンなどの口添えで、小説家ではディケンズ以来、詩人ではテニソン以来絶えてなかったウェストミンスター・アビーへの遺体の一部埋葬が許可されたのだった (Millgate 574)。ハーディの迷信＝スーパーナチュラリズム批判がキリスト教批判であると誤って伝わっていたことをこのエピソードは物語っている。彼はキリスト教そのものの批判したのではなく、迷信や奇跡と教義をない交ぜにしたセント・ポールのキリスト教を批判したのだということをここで再確認しておく必要がある。彼が求めていたのは英国国教会が「理に叶ったものになること (rationalizing)」(F. E. Hardy 415)、言い換えれば迷信と手を切ることであった。

『テス』というテキストは多くの層からなっていて、その中に巧みに埋め込まれたメッセージを、ちょうど考古学者が古代ギリシャの壺を壊さないように地中から掘り出すように、あるがままの形で掘り出して読む必要がある。このテキストは過激なキリスト教批判と誤解されかねないハーディの主張を、19世紀中葉のイギリスの市場経済に翻弄される農村の現状と断頭台の露と消えたヒロインの生き方と密接に絡ませながら、巧みにカムフラージュしたという点で、これはまた優れた宗教小説だと言わねばならない。

〔注〕

- (1) ヴィクトリア朝の中後期にスピリチュアリズムに関心を持っていた著名人として、Robert Dale Owen, Alfred Russel Wallace, William Henry Harrison が挙げられる (Noakes 29-30, Schollossberg 270-4)。オーウェンはアメリカの政治家、ウォーレスはイギリスの博物学者で、インドネシアの動物分布の境界線、いわゆるウォーレス線を特定したことで有名。ハリソンはアメリカの第9代大統領。
- (2) 『ハーディ伝 (*The Life of Thomas Hardy*)』には超自然的なものについての伝聞が取められている。サマーセットで羊毛を入れる袋状の「得体の知れないもの (things)」がしばしば目撃されて、馬はどんなに鞭を入れてもその先へ進まないという、1902年4月の記事はその一つ (F. E. Hardy 314)。
- (3) マックス・ウェーバー、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』はこの点に詳しい。144ff.
- (4) エリオットの伝記的背景は Gill を参照した。
- (5) 1908年の手紙には、「私は今も昔も正統なキリスト教徒でした」とある (*Selected Letters* 204)。
- (6) エヴァンジェリカリズムは本質的にプロテスタントで、18世紀にメソディストが国教会内で改革派として勃興したときにその対抗勢力として始まったという歴史を持つ。ところがメソディズムの創始者のウェズレーの意図に反してメソディストは国教会の外に出て、一方でエヴァンジェリカルはその中で活動を続ける。下の宗教地図で、エヴァンジェリカルズは church methodists と呼ばれるが、そのような「コウモリ的な (ほ乳類と鳥類の特徴を併せ持った)」、中途半端な姿勢を揶揄する High Church からの批判的呼称である。そういう経緯から、メソディストは英国国教会の外に出た現在でも『一般祈禱書 (*the Book of Common Prayer*)』を用いている。エヴァンジェリカル (低教会派、福音主義者) であるエンジェルの父親によって、回心したアレックがメソディスト派の牧師 (この場合は a lay preacher. メソディストは一般の信徒が布教や説教をすることが許されていた。1803年までは女性も説教師として活動した。) と

なるのは、だから、決して不自然ではない。低教会派とは対照的に、キリスト敎の敎義、特に聖書の記述を杓子定規に受け取ることをしない人たちもいて、「広教会 (Broad Church)」派と呼ばれた。こちらは特定のグループを指すのではなく、聖書を自由に、科学的に解釈しようという人たちを指して言う。

- (7) 広教会派の知識人で、聖書中のスーパーナチュラリズムを批判した人物としては Samuel Taylor Coleridge, Richard Whately, H. H. Milman, Thomas Arnold, Connop Thirlwall などが挙げられる。ミルマンはセント・ポール大聖堂の首席司祭を務めた。トマス・アーノルドはマシューの父で、ラグビー・スクールの校長でもあった。いずれも聖書の奇跡譚をアレゴリーとして読むことを提唱したり、宗教的なインスピレーションと考えたりしながらも、キリスト敎を正面から批判することは避けている。詳しくは Gilmour 95ff.; Parsons 242ff. を参照。

Works Cited

- Andrews, Stuart. *Methodism and Society*. Tirril: Humanities EBooks, 2007. Web.
- Baker, Juliet. *The Brontës*. NY: St. Martin's, 1994. Print.
- Bebbington, David W. *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730's the 1980's*. 1989. Grand Rapids, MI: Baker, 1992. Print.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Oxford World's Classics. Ed. Margaret Smith. Oxford: Oxford UP, 1975. Print.
- . *Shirley*. 1849. Oxford World's Classics. Ed. Herbert Rosengarten and Margaret Smith. Oxford: Oxford UP, 1981. Print.
- Chadwick, Owen. *The Victorian Church*. 2 vols. 1970. London: SCM, 1987. Print.
- Davie, Donald. *Thomas Hardy and British Poetry*. London: Routledge, 1973. Print.
- Doyle, Auther Conan. "The Coming of the Fairies."
<http://www.sacred-texts.com/neu/eng/cof/index.htm>
- Eliot, George. *Adam Bede*. Ed. Stephen Gill. 1859. Harmondsworth: Penguin, 1981. Print.
- Gallagher, Susan Van Zanten. "Jane Eyre and Christianity." *Approaches to Teaching Jane Eyre*. Ed. Diane Long Hoeveler and Beth Lau. New York: MLA, 1993. 62-8. Print.
- Gill, Stephen. "Introduction." *Adam Bede*. Harmondsworth: Penguin, 1981. 11-42. Print.
- Gilmour, Robin. *The Victorian Period: The Intellectual and Cultural Context of English Literature, 1830-1890*. London: Longman, 1993. Print.
- Griesinger, Emily, "Charlotte Brontë's Religion: faith, feminism, and *Jane Eyre*." *Christianity and Literature*. 58: 1 (Autumn 2008): 78-102. Print.
- Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy, 1840-1928*. 1962. London: Macmillan, 1975. Print.
- Hardy, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Hardy*. Ed. James Gibson. New York: Macmillan, 1976. Print.
- . *Jude the Obscure*. The World's Classics. Ed. Patricia Ingham. 1895. Oxford: Oxford UP, 1985. Print.
- . *Selected Letters of Thomas Hardy*. Ed. Michael Millgate. Oxford: Clarendon P, 1990. Print.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. The World's Classics. Ed. and introd. Simon Gatrell. 1891. Oxford: Oxford UP, 1983. Print.
- Harris, Terry G. "Burying the Dead: Mathew Arnold and the Dissenters." *The Victorian Newsletter*. 98 (Fall 2000), 26-29. Print.
- Helmstadter, Richard J. "The Nonconformist Conscience." *Religion in Victorian Britain: Interpretations*. Manchester: Manchester UP, 1988. 61-95. Print.

- Hempton, David. *Methodism: Empire of the Spirit*. New Haven: Yale UP, 2005. Print.
- Hindmarsh, D. Bruce. *The Evangelical Conversion Narrative: Spiritual Autobiography in Early Modern England*. Oxford: Oxford UP, 2005. Print.
- Hynes, Samuel. *The Pattern of Hardy's Poetry*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1961. Print.
- Jay, Elisabeth. *The Religion of the Heart: Anglican Evangelicalism and the Nineteenth Century Novel*. Oxford: Clarendon P, 1979. Print.
- Kent, John. *Wesley and the Wesleyans: Religion in Eighteenth-Century Britain*. Cambridge: Cambridge UP, 2002. Print.
- The King James Bible. 1611. Ed. Robert Carroll and Stephen Prickett. Oxford: Oxford UP, 1997. Print.
- Mack, Phyllis. *Heart Religion in the British Enlightenment: Gender and Emotion in Early Methodism*. Cambridge: Cambridge UP, 2008. Print.
- McLeod, Hugh. *Religion and Society in England, 1850-1914*. Houndmills: Macmillan, 1996. Print.
- Melnyk, Julie. *Victorian Religion: Faith and Life in Britain*. West Port, CT: Praeger, 2008. Print.
- Mill, John Stuart. *On Liberty*. *On Liberty and Other Essays*. Ed. John Gray. Oxford: Oxford UP, 1991. 1-128. Print.
- . "Three Essays on Religion." *Essays on Ethics, Religion, and Society*. Ed. J. M. Robson. Vol. 10 of *Complete Works of John Stuart Mill*. 17 vols. Toronto: U of Toronto P, 1969. 369-489. Print.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography*. New York: Random House, 1982. Print.
- Noakes, Richard, "Spiritualism, Science and the Supernatural in Mid-Victorian Britain". *The Victorian Supernatural*. Ed. Nicola Bown, C. Burdett, and P. Thurschwell. Cambridge: Cambridge UP, 2004. 23-43. Print.
- Parsons, Gerald. "Biblical Criticism in Victorian Britain: From Controversy to Acceptance?" *Religion in Victorian Britain: II Controversies*. Ed. Gerald Parsons. Manchester: Manchester UP, 1988. 238-57. Print.
- Schlossberg, Herbert. *Conflict and Crisis in the Religious Life of Late Victorian England*. New Brunswick: Transaction, 2009. Print.
- Perkin, J. Russell. "Charlotte Brontë's *Shirley* as a Novel of Religious Controversy." *Studies in the Novel* 40.4(2008): 389-406. Print.
- Taves, Ann. *Fits, Trances, and Visions: Experiencing Religion and Explaining Experiences from Wesley to James*. Princeton: Princeton UP, 1999. Print.
- Watts, Michael R. *The Dissenters Vol. 2: The Expansion of Evangelical Nonconformity*. Oxford: Oxford UP, 1995.
- ヴェーバー、マックス 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 大塚久雄訳、岩波書店、1989.

(あわの しゅうじ 英米学科)

2010年10月12日受理

イギリスの宗教地図

